





肉迫

北方謙三

角川書店

肉迫（にくはく）

発行日——昭和62年 1 月31日 初版発行

著者——北方謙三

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店 〒102

東京都千代田区富士見 2 —13— 3

電話——営業 03-238-8521

編集 03-238-8451

振替——東京3-195208

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社宮田製本所

©Kenzo Kitakata 1987 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872460-6 C0093

目次

第一章 キーラーゴの男

5

第二章 狼の血

155

装丁
荒川じんぺい

肉 迫

第一章 キーラーゴの男

1 海流

横波が、船腹を打った。

揺れそのものは、ひどくない。時々、避けきれない横波が、船体を傾けるくらいだ。

船底が海面を打つくらい縦揺に見舞われると、安見は小さな背中をふるわせて吐きはじめる。横揺の方がまだいいというものも、おかしいものだ。もつとも、本格的な時化では、揺れは縦も横も同時に襲ってくる。

私はパイプに火を入れ、海図を覗きこんだ。どうということもない距離だ。海が静かなら、快適なクルージングになっただろう。釣でもしながら、行けたかもしれない。

「ロン・コリ、一杯作ろうか？」

土崎三生が、白いものがかなり目立つ顎髭を掌で撫でながら入ってきた。飛沫で濡れたようだ。土崎は、髭がもっと白くなることを望んでいた。真白になれば、ようやく髭だけはババに似てく

るというわけだ。パパと言っても父親のことではなく、彼の好きなヘミングウェイのことだった。

「一杯だけ、貰おうか」

「お嬢には隠れてやりなよ。いま、お嬢はなんにも飲まねえ方がいいから」

「わかってるさ」

私は、遠くの波の具合を双眼鏡で確かめた。海流が複雑に入り組んだ海域なので、波も思わぬ方向からやってくる。

船は、車と違って、鋭敏に舵に反応しない。小回りが利かないというやつだ。遠くにある波に備えて、早くから方向を修正しておいた方がいい。

ロン・コリが計器盤の上の台に置かれた。土崎が作るものは、いつも甘すぎる。キューバふうにやろうとして、砂糖を多目に入れてしまうのだ。ほんとうはモヒートを作りたいのだろうが、日本ではミントの葉が手に入らない。ラム酒だけは、ハバナクラブをどこからか手に入れてきた。

「日本の海も、悪かねえな。このところ、そう思えてきた」

「死んだ色をしてる、と言ってたじゃないか」

「そりゃな。十年近くカリブ海を眺めて暮してきたんだ」

といって、土崎がキューバにいたことはなかった。キーラーゴというフロリダ半島の街で、何年か漁師をやっただけだ。

「バラクーダがいりゃ、俺もこの海で満足なんだが」

「忘れろよ、アメリカのことは」

私は、ロン・コリを口に運んだ。アップパーブリッジの運転席からは、白波を立ててぶつかる沖

の海流がよく見えた。

秋の終りの、ちよつと荒れ気味の海。そういう海が、私は好きだった。

沖を、タンカーの黒い影が走っていく。ほかに、漁船がいくつか見えるだけだ。

ロン・コリを一杯飲み干すと、私は運転を土崎に任せ、下のコックピットへ降りていった。ヨットをやる連中が使う、海図をよく頭に入れた。沿岸部には、かなり暗礁がある。どこは確実に通れるのか。どこは満ち潮の時だけ通れるのか。

ただのクルージングより、スリリングな方が私は好きだった。もつとも、ことさら危険を求める傾向はない。

「まだ着かないの、パパ？」

キャビンのリビングから、安見が顔だけ出した。

「外に出て、風に当たれ。その方がいくらかましだぞ」

「大丈夫。あたし酔ってなんかいないから」

そばへ来て、安見が海図を覗きこんだ。

「どこなの、いま？」

私は鉛筆のさきで、海図の一点を指した。

「あと一時間、というところね」

「その気になって走れば、四十五分だな。暗礁と暗礁の間を抜けることになるが」

「四十五分で、行くつもりなの？」

「その気だから、海図を見てる」

「ママがいたら、叱られたとこよ」

私は、肩を竦めた。安見の母親には、もう私を叱りようもなかった。

「東京の学校は、やっぱり気が進まないか？」

「それを、ずっと考えてたわ。問題は、パパのそばにどうか、ということでしょう。だから、あたしだけの希望で決めることじゃないと思うの」

十一歳だったが、もう大人のような口を利く。確かに、私が安見と一緒に暮した方がいいのかどうかの問題だった。

「おばあちゃんは、東京で暮したがってる。そのための部屋も、ちゃんと用意した」

「パパをひとりしておくのが、心配なの」

「大人をからかうな」

「食事は作れない。洗濯もできない。どこから見ても、自立してないんだから」

私は、拳で安見の頭を軽く小突いた。安見が、ちょっと舌を出す。

こういうことのひとつひとつが、生活の中の幸福だ、と思える時期が確かに私にはあった。それは、すでに遠い。

「暗礁だぜ」

土崎が上から伝えてきた。

私は、アップパーブリッジの運転席に戻った。雨の日などは下のコックピットを使うが、見通しがいいので大抵は上の運転席だった。

「突っ切るのかね、キャブテン？」

「いま、安見に叱られたとこだがね」

速度を落とした。

大して難しい水路ではなかった。この暗礁をかわせば、大回りして沖を通る必要はない。荒れ気味なので、船が流されないように気をつけた。速度を、あまり落とすのは危険だった。

思ったより、よく言うことを聞く船だ。この三か月ほどの間に、性能はほぼ揃みきっていた。速い船というわけではないが、乗心地は上々だった。売りに出ていたものを言い値で買った時、土崎はブツブツと不満を並べたものだが、いまはもうなにも言わない。

暗礁が近づいてきた。点々と、沖まで二キロほどの暗礁が連続しているが、抜けられる場所が二つある。漁師がよく使う水路なのだろう。ガラス製のブイが、目印に二つ浮いていた。

「なかなかなものになったよ、あんたの操船も。はじめのころは、判断が遅くて胆を冷やしたもんだ」

私がクルーザーの運転をはじめたのは、フロリダでだった。アメリカではじめて事業の、ささやかな成功の象徴のようなものだった。安見が六歳になったころのことだ。

「お嬢は、下でふるえてんじやあるまいな」

「あれは、結構度胸が据ってる。日本に戻ってから、特にそれを感じるね」

「母親のいない子は、男親みたいに強くなるってことかい」

「母親の方が強い。結婚してない土崎さんにはわからんだろうがね。あれは、母親か、もしくは俺の女房の役割りを果たたそうとしてるよ。自分じゃ意識せずにだ」

「十一じゃねえか、お嬢はまだ」

「それが女さ」

暗礁は難なく抜けた。もうちょっと大型の船だったら、船底に神経を使わなければならなかっただろう。

速度をあげる。アップバーブリッジに吹きつける風が、強くなった。

「このまま、ひっそりと暮そうって気にやなねえのかい。そうやっていけるぐらいの金はあ
るじゃねえか」

「この船を買った」

「十隻は買える金があるだろうが」

「ひっそりと暮すのも、いいかもしれん。しかし、それはやることをやってからさ。このまま、
負け犬のままで生きられはせんよ」

「誰も、あんたを負け犬とは思っちゃいねえさ。相手が卑怯だった。だけど、あんたはちゃんと自分のものを守った。日本に引き揚げることになったが、自分のものはしっかり守ったんだ」

「一番守らなげやならんものを、守ることができなかった」

「それが、卑怯ってのさ。あんたの奥さんは、なんの関係もなかった。そりゃ、お互いに了解
してることだったろう。そんな連中を相手にして、なんになる。あんたは、もともとまともなや
り方しかできねえ男だ。それが、あの連中ときたら、やり方もクソもねえや」

「俺は、変ったよ。何度も言っただろう」

「男は、そう簡単にや変れねえもんだ」

全開にした。

船の揺れは小さくなった。それでも、せいぜい二十ノットちよつとというところだ。二十五ノット出れば、申し分ないクルーザーになるだろう。

「あそこに着く前に、俺はもう一度だけ言っておきたかった。着いちゃったら、はじまつたってことだからな」

土崎が、ジッポで吸いかけの葉巻に火をつけた。ホンジュラス産だ。いつもハバナ産を欲しがつていたが、アメリカにいたのでは手に入らなかった。

「俺は、下へ行ってお嬢の様子を見てこよう。酔っ払って苦しんでるかもしれないし」

「酔っちゃまつたら、どうしてやりようもない。放っておくしかないぜ」

「娘っ子だぞ。それでも父親か」

土崎がキャビンに降りた。

私は陸の方へ眼をやった。双眼鏡を使わなければ、家々の屋根まで確認することはできない。しかし、そこに間違いなく陸地がある。私が行くべき街がある。

二度、ホーンを鳴らした。

「なんかあつたのか？」

土崎がキャビンから顔を出した。

「別に。ただ挨拶してやっただけだ」

「どの船に？」

「船じゃない。俺の心の中にさ」

「また、わからんことを言う」

かすかに首を振って、土崎は煙を吐き出した。そのまま、アップパーブリッジにあがってくる。

「俺は、こっちにいることにしよう。葉巻の匂いをお嬢に嫌われちゃった」

「もうすぐ、マリーナの旗が見えてくる」

「そうだな」

風が鳴った。

不吉な音だ、と私は思った。それを拭い消すように、私は飛沫で濡れた顔に掌をこすりつけた。

2 街の灯

顔色の悪い男だった。

海にでも連れ出して、陽に灼いてやりたいような気分になる。神経質そうな指さきで、パイプに詰めた葉をさかんに気にしていた。会うのは、これで二度目だ。電話でも何度か話しているが、声の感じよりずっと不健康な印象だった。

「腎臓をやられちゃってね。ごついキドニー・ブローを食らって。週に二度は透析をしなくちゃならないんですよ」

軀は痩せた感じなのに、顔だけがむくんだように見えるのは、そのせいなのか。

「調べるだけのことは、調べておきましたかね」

宇野弁護士は、テーブルの上の書類を指さきで軽く弾いた。この街で一番優秀な弁護士ということで、依頼した。病氣持ちだとしても、頭は切れるという感じがある。

「難物だな、これは」

「とうとう？」

「絡んでる男が、面倒でね。この街を、その気になれば牛耳れる男ですよ」

「しかし、牛耳る気はない？」

「野心に欠ける。もともとその男を成功させたのは、つまり野心に無縁だったからと言っていい。つまり、最後は損得抜きで動いちゃうようなやつです」

「その男と、対立したくはないということですか」

「とんでもない。俺の天敵みたいなやつですよ」

「ほう」

「俺は、キドニーってニックネームで呼ばれててね。つまりは、その男が俺に贈ってくれた唯一のものってわけです」

「キドニーか。悪くないな」

「フロリダでも、通用しそうですね」

きちんと整った事務所だった。入口の部屋にいる秘書の態度も、悪くはなかった。

宇野がパイプに火を入れ、濃い煙を吐いた。土崎が喫っている葉巻よりはましだ。私も煙草に火をつけた。四年禁煙したのが、元も子もなくなっている。喫いはじめたのは、八か月前だった。

「私の方の、法的な問題点は？」

「なにも。あの土地に絡んで、この間事件が起きましてね。だから、誰もあそこに手を出そうとしてない。あの隣の土地を借りたのは、実に的を射た戦略だったと言っていい。借地権は正式

に発効していて、いまさら地主がなんと言おうと、通りはしませんよ。買うんじゃない、借地を申しこんだのが、ポイントでしたな。むこうが情報を掴むのが、それでかなり遅れた」

宇野が、三度続けて煙を吐いた。三度目に吐いた煙は、かなり濃くなっていた。

私が借りた土地。海際にある広大な土地のそばに、小さな畠があった。せいぜい三千坪くらいのものだ。地主は、私が出した条件をすぐに呑んだ。

あの土地の買収工作だけが見落とされていたのか、それとも意図的に放置してあったのか、私にはわからなかった。地主が、値を吊りあげようと、粘っていたという気配はなかった。私が呈示したそれほど高額ではない金に、意外そうな表情をしたくらいだ。

「岡本という男は、意外に計算高いのかもしれない。あの土地を手に入れるのも、上からドンという感じじゃない。少しずつ時間をかけて手に入れてる。あの三千坪も、放置しておけば地主が嫌気がさして、安く手放す気になる。そう目論んだのかもしれない」

煙を吐き続けながら、宇野は喋っていた。私は煙草を消した。出されたコーヒーが、冷めきっている。

「あそこに、広大なリゾートタウンが建設されれば、市の発展のためにもいいこととされている。まずよ」

「横槍は理不尽ですかね？」

「まあ、そうでしょう。まず、あなたがなにを建てようとしても、建築許可は下りないだろうし」

「ビルを建てようとは思ってない。この間、説明したでしょう」